第二十四課

我が子が海へ落ちた

九州での夏の出来ごとでした。

今日は、仕事が休みでした。久しぶりに海へ行こうかという事になりました。その男の子を連れて三人で行く事にしました。かなり高い堤防でした。私達夫婦と子どもより先を歩いておりました。

ですから、子ども、私達より、おくれて後から来ました。

とゞかの時に私より先で釣りをしていた人が、オイ、オイ、こどもが海へ落

ちだ！！

と、叫び声が聞こえた。

私は、一瞬ドキッとした。

に、警察の車が走ってい

私は、うっとうしそうに振りむ

いた。はずの大事な国旗が

ないっすぐに海面を見た

が、こどもの姿は、なかった

どこへ、沈んでいるのかも

わからない。早く探さなくと

国旗が死んだ！！なっ

とにかく海へ飛び込そう

そして、足からとびこんだ。

海中で立ちおよぎの状態

目を開き海中を見わたす

しかし、私は回転をする

が探が探がしたがどこにも姿

は見えないもう海底深く

に沈んでしまったのだろう

かいやそんな時間は経っ

まだ浮いているはずがもう少し沖に出てみよう、おおい……見えた。海中で手足を動かしている。良かった。まだ生きている。だが私が息苦しくなってきた。私が海面までとかっていたら、国確の命がなくなる。急に進もう。あわてず、落ち着いて国確も戦っているのだ。もっすぐだ。頑張れよ。苦しい。

国確の背中の方に着いた。国確の背中の方から手をまわし、襟をつかんで。残りの気力で。両足を思いきり蹴り、右手も上から下へ思いきり水をかき出した。海面に二人ともどうでに顔を出した。フーフーと息をしながら。堤防まで泳ぎ着いた。だが

この先どのようにして堤防を築き上げたのかはまったく覚えていないのでございます。

子どもの命が助かった理由があったと。三つ良い条件が重なっておりました。備前天の神さまありがとうございます。堤防が石がきで作られていた事。

今でなかったことしあわせでもっとも不幸なのは、たまたま、釣人がいて大声を出してもらった事であります。

名前もかかずに恐れ多ありがとうございました。

コクヨ　ケ-10　20×20